JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 60 回 日本語教育方法研究会（30 周年記念研究会）
対面開催　於　東京工業大学　大岡山キャンパス
2023 年 3 月 18 日(土)、3 月 19 日（日）

第 60 回研究会を東京工業大学大岡山キャンパスにおいて 2 日間にわたって開催いたします。第 1 日（3 月 18 日）に 30 周年記念イベントを、第 2 日（3 月 19 日）に通常の形の研究会を行います。

第 1 日・30 周年記念イベントでは、日本語教育実践のさまざまな面に焦点を当て、当研究会のこれまで・現在・これからを共有し、会員の皆様がそれぞれの教育現場で活用していけるような企画を予定しています。第 2 日は、3 年半ぶりの対面による研究会となります。日々の実践をめぐって、顔を合わせてさまざまな議論が活発に交わされることを期待しております。ぜひご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

なお、未だ新型コロナウイルス感染症の威力が収まらない状況下での開催となるため、下記感染対策にどうかご理解・ご協力ください。

また、運営上の事情から、第 1 日・30 周年記念イベントは事前申し込み制とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

会長　松崎寛

第 60 回研究会　感染対策

- マスクを着用してください。
- こまめに手指消毒をしてください。
- ポスター発表やその前後の議論では、適切な距離を保ってお話しください。
- 昼食交流会は行いません。

＊学内の食堂は営業していません。持参・周辺の飲食店利用などでご対応ください。

＊持参された昼食は、会員控室でおとりください。その際、会話を控える・食事が済んだらすぐにマスクを着けるなどご配慮ください。

＊ごみは持ち帰ってください。

目次

【会場案内】 3

【第１日・30 周年記念イベント】 4

第１日・30 周年記念イベント　開催スケジュール 4

第１日・30 周年記念イベント　企画内容 5

【第１日・30 周年記念イベント　参加方法】 7

【第２日・研究会】 8

【第２日・研究会　参加方法】 8

【第２日・研究会　プログラム】 9

【午前の部】 9

●口頭発表（２件） 9

●ポスターセッション１（上記２件を含む 22 件） 9

【午後の部】 15

●口頭発表（２件） 15

●ポスターセッション２（上記を含む 22 件） 16

●ポスターセッション３（22 件） 22

【凡人社による出張販売】 29

【会費納入のお願い】 29

【会場案内】

東京工業大学　大岡山（おおおかやま） キャンパス　西９号館

〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1

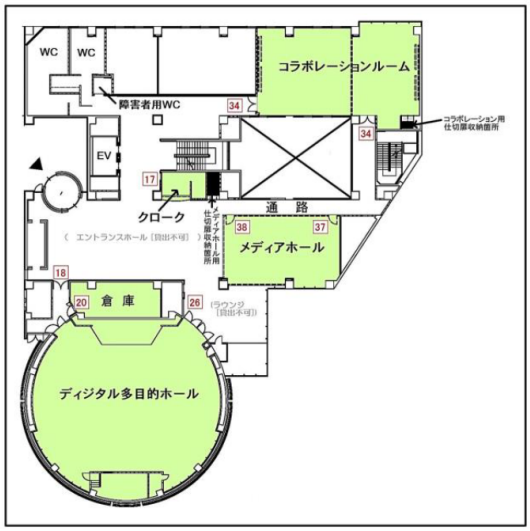
最寄駅：大岡山（おおおかやま） 駅（東急大井町（とうきゅうおおいまち） 線・目黒（めぐろ） 線）

＊「２Ｆ・玄関１」よりお入りください。

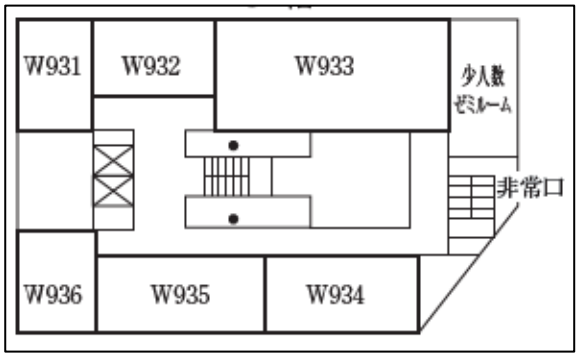
東京工業大学ホームページ　大岡山西９号館より引用

https://www.ssc.titech.ac.jp/amap/home/ookayama/west/bldg9/

西９号館　２階



西９号館　３階



【第 1 日・30 周年記念イベント】

TABLE 1　第 60 回研究会・第 1 日・30 周年記念イベント

日　時　：	2023 年 3 月 18 日（土）
会　場：	東京工業大学　大岡山キャンパス　西 9 号館
開催委員：	佐藤礼子（東京工業大学） 河野俊之（横浜国立大学）、俵山雄司（名古屋大学）、 中川健司（横浜国立大学）、根津誠（国際交流基金）、 平山允子（日本学生支援機構）

第 1 日・30 周年記念イベント　開催スケジュール

12:30-13:00　参加受付

13:00-13:10　全体会（趣旨説明）

13:20-17:00　JLEM お勧め論文

13:20-14:50　分科会第一部

A「教室でも簡単検索
　—手軽にコーパスを使ってみよう！」

B「JLEM で発表しませんか？
　—あなたの発表、応援します！」

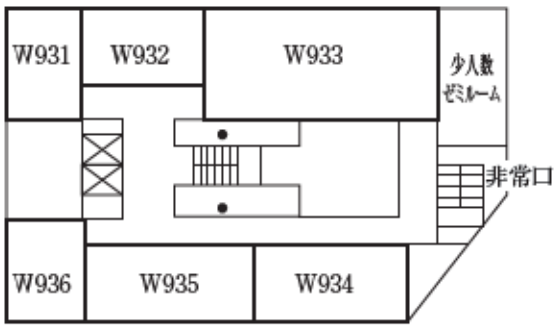
15:00-16:30　分科会第二部

A「実践研究の方法」

B「JLEM 発表を経た教材—あの発表が教材に！」

16:30-17:00　全体会（対面ブレイクアウトセッション）

西 9 号館　3 階



	第一会場（W933）	第二会場（W935）	第三会場（W932）
13:00-13:10	全体会（趣旨説明）	—	JLEM お勧め論文展示
13:20-14:50	教室でも簡単検索—手軽にコーパスを使ってみよう！	JLEM で発表しませんか？ —あなたの発表、応援します！	
15:00-16:30	実践研究の方法	JLEM 発表を経た教材 —あの発表が教材に！	
16:30-17:00	対面ブレイクアウトセッション	対面ブレイクアウトセッション	

第 1 日・30 周年記念イベント　企画内容

13:20-17:00

「JLEM お勧め論文」　第三会場（W932）

担当委員：中川健司・河野俊之（横浜国立大学）・世良時子（北里大学）

創立 30 周年を迎える日本語教育方法研究会（JLEM）では、これまでに数多くの発表が行われてきました。JLEM で行われてきた発表を振り返るという目的で、会員のみなさんにもっと知ってほしい論文（発表）を「JLEM お勧め論文」としてご推薦いただきました。「JLEM お勧め論文」には、「明日のクラスでも活用できる内容」「この頃にこの内容の研究が行われたのは、革新的だった」「他機関の参考になる内容」といったコメントをいただいています。またそれに加えて、JLEM 優秀賞・奨励賞受賞者の方々に受賞論文についてコメントをお寄せいただきました。

当日は、「JLEM お勧め論文」と推薦者（受賞者）のコメントを掲示し、参加者の皆さんも各論文に付箋でコメントをつけられるようにします。お時間がある時にお立ち寄りいただければ幸いです。

13:20-14:50　分科会第一部

A「教室でも簡単検索―手軽にコーパスを使ってみよう！」　第一会場（W933）

担当委員：根津誠（国際交流基金日本語国際センター）・俵山雄司（名古屋大学）

コーパスは授業準備に使っても、学習者に使わせるのはハードルが高いと思っていませんか。このワークショップでは、教室でコーパス（BCCWJ）を使って少納言や NLB で検索する活動を、学習者役として体験した後で、授業でのコーパス利用の経験や、可能性について話し合いましょう。

【講師】

内海陽子（海外産業人材育成協会）

木田真理（元国際交流基金日本語国際センター）

清水まさ子（国際交流基金日本語国際センター）

清水由貴子（聖心女子大学）

進行：根津誠（国際交流基金日本語国際センター）

（スマートフォンやタブレットを持参しない人は、デモンストレーションを見て議論に参加できます。また、フリーWi-Fi の提供はしませんので、ネットワーク接続はご自身の責任でお願いいたします。なお、eduroam は利用できます。接続時に再度 ID とパスワードが求められる場合がありますので、事前に確認しておくことをお勧めします。eduroam に関して、会場の大学も JLEM も技術的なサポートはしないこと、ご承知おきください。

参考サイト：https://www.eduroam.jp/for_users）

B「JLEM で発表しませんか？―あなたの発表、応援します！」　第二会場（W935）

担当委員：平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）・中川健司（横浜国立大学）

初めての発表や、久しぶりの発表をしたいけど、ちょっと不安…。

　こんな教育実践をしているけど、発表の形にまとめられないかな…？
などなど、発表に踏み出す勇気が欲しい方に向けた企画をご用意しました。JLEM 発表経験者の話を聴き、心配事やアイディアをみんなで話し合ってみませんか。
【当日の予定】
13:20-13:25 趣旨説明
　中川健司（横浜国立大学）
13:25-13:55 発表経験者の話―経験談とメッセージ―
　ラマダン・ヘバ（大阪大学大学院生）
　平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター教員）
13:55-14:45 ディスカッション
　参加者 4～5 名＋JLEM 委員 1 名のグループでざっくばらんにいろいろ話し合います。
14:45-14:50 まとめ
※本企画は定員 20 名です。定員を超えるお申し込みがあった場合は、申し込み締め切り後に抽選で参加者を決定させていただきます。

15:00-16:30　分科会第二部
A「実践研究の方法」　第一会場（W933）
担当委員：河野俊之（横浜国立大学）・平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）
　実践研究を行い、JLEM で発表してみたいという方は非常に多いと思います。しかし、実践研究とは何をしたらいいかわからないという方も多いでしょう。
　そこで、教室活動の身近な例について、まず、今までと違う方法を考えてみることで、教え方の幅が広がり、それによって、授業の改善につながることや、コース全体を変えるのではなく、コースの中の授業の一部を変えるのも十分、価値があるということを体験します。
　さらに、現状を把握し、それを元にコース全体を変えてみることについても検討します。その際、JLEM 等、他の実践研究や理論について、どう取り入れられるかを具体的に考えてみます。
　最後に、実践だけでなく、実践研究にすることについても考えていきます。
【話題提供者】
佐藤礼子（東京工業大学）
鈴木綾乃（横浜市立大学）
河野俊之（横浜国立大学）

B「JLEM 発表を経た教材―あの発表が教材に！」　第二会場（W935）
担当委員：俵山雄司（名古屋大学）・根津誠（国際交流基金日本語国際センター）
　教材開発中に JLEM で発表し、その後、出版された教材の著者 3 名をお呼びし、教材のコンセプトや使い方、開発の経緯を語っていただきます。また、そこから、教材開発過程における、JLEM の利用法の可能性を一緒に考えてみたいと思います。

【話題提供者】

・俵山雄司（名古屋大学）　趣旨説明・司会

・小河原義朗（東北大学）　教材：小河原義朗・木谷直之著『再話を取り入れた日本語授業　初中級からの読解』（2020 年、凡人社）

・髙井美穂（大阪大学）　教材：今田恵美・髙井美穂・吉兼奈津子・藤浦五月・田中真衣著『関係作りの日本語会話　雑談を学ぼう』（2021 年、くろしお出版）

・木戸光子（元筑波大学）　教材：杉浦千里・木戸光子著『おしゃべりしながら書くことを楽しむ中級作文』（2020 年、凡人社）

16:30-17:00　全体会（対面ブレイクアウトセッション）

オンライン開催の研究会では、ブレイクアウトセッションで交流会を行っていました。今回は、久々に対面での交流会となります。10 前後のトピックのテーブルを設けますので、ご希望のテーブルにご参加ください。

現時点では、以下のようなトピックを考えています。

・JLEM 初心者部屋

・学生の交流部屋

・コーパス

・実践研究

・ビジネス日本語

・アカデミックジャパニーズ

・教師養成・教師研修

・地域の日本語教育

・作文

・会話

・読解

【第 1 日・30 周年記念イベント　参加方法】

参加費：無料

事前申し込み：以下のフォームより 2023 年 3 月 11 日（土）までにお申し込みください。

https://pro.form-mailer.jp/fms/0d843ac6278107

【第２日・研究会】

第 2 日（3 月 19 日）に第 60 回研究会を行います。

会長　松崎寛

TABLE 2　第 60 回研究会

日　時　：	2023 年 3 月 19 日（日）
会　場：	東京工業大学　大岡山キャンパス　西 9 号館
開催委員：	佐藤礼子（東京工業大学）
	内藤真理子（事務局：電気通信大学）、畠山理恵（同左：文化学園大学）

TABLE 3　開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付	13:30	口頭発表
	ポスターセッション１のポスター貼り付け	14:00	ポスターセッション２開始
10:00	全体会	15:15	ポスターセッション２終了
	―開会の挨拶		ポスターセッション３のポスター貼り付け
	―進めかたの説明	15:30	ポスターセッション３開始
	―口頭発表	16:45	ポスターセッション３終了
10:45	ポスターセッション１開始	16:55	全体会
12:00	ポスターセッション１終了		－講評
	ポスターセッション２のポスター貼り付け		－JLEM 賞発表
			－次回研究会の説明
12:15	昼食		－全員で後片付け

【第２日・研究会　参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にお越しください。ただし、今回限りの措置として、2022 年度会費未納の会員および非会員に対する研究会誌の販売を取りやめます。

＊感染対策の一環として受付で現金のやりとりが発生しないようにするためです。

【第２日・研究会　プログラム】

発表課題の前の番号は、ポスターセッションごとの番号で、括弧内は全体の通し番号です。S*-**とは、「ポスターセッションの番号－その中での番号」を示しています。

例えば「S3-13（57)」は、ポスターセッション３の中での発表番号は 13 で、全体での通し番号は 57 という意味です。研究会誌には、この括弧内の通し番号の順番に掲載されます。

【午前の部】

●口頭発表（２件）

S1-01 (1).オンラインのニュース聴解授業におけるディクトグロスの効果

藤田裕子（桜美林大学）

本研究はオンラインでニュース聴解を行う授業でディクトグロスを用い、その効果と学生の反応を分析した。その結果、学生たちのニュース聴解力、ノートテイキング力に向上が見られた。さらに学生たちのメタ認知的思考、学習者間での協働も示された。また、学生たちは自身の能力の向上を実感しており、オンライン授業でのディクトグロスに対する反応も良好であった。以上のことから、ディクトグロスをオンライン授業に取り入れる価値はあると言える。さらに学生の反応から、対面でディクトグロスを行う際にも、グループでの話し合いの後に個人で考える時間を取ると、メタ認知を働かせたより正確な文章の産出につながるのではないかと考えられる。

S1-02 (2).コーパスツールを用いた継続的なライティング活動　―効果的な活用を目指して―

板井芳江・寺嶋弘道（立命館アジア太平洋大学）

本研究では、ライティングにおいてコーパスツールをうまく活用できなかった学習者３名が改善を加えた「ライティングにおけるコーパスツール活用モデル」を用いてライティング活動に参加することで、どのような変化が起きたかを報告する。分析の結果、改善した方法では、多様なパターンでコーパスツールが使用され、コーパスツールを用いてより多くのコロケーションが作文に取り入れられたこと、事前に作成した短文が作文の一部として取り入れられたことがわかった。一方、コーパスツールを使用した箇所で誤用になるケースや短文が原因で作文に問題が起きるケースが見られた。

●ポスターセッション１（上記２件を含む 22 件）

S1-03 (3).小学校社会科および理科の教科書語彙の特徴

山本裕子（愛知淑徳大学）・川村よし子（元東京国際大学）・鷲見幸美（名古屋大学）

発表者らは小学校の教科書語彙を調査し、外国人児童のための日本語支援に資する資料の提供を目標とした研究を進めている。本研究では、社会科のみで用いられる語（社会科語）、理科のみで用いられる語（理科語）、両方の教科で用いられる語（理社共通語）を抽出し、特徴を分析した結果を報告する。 社会科語の異なり語数は理科語の４倍に上り、社会科でのみ用いられる語も多い。また、社会科

語も、理科語も高頻度語は教科学習に重要な語であるが、教科書では複合語として用いられるものも多く、複合語で提示する必要がある。そして、理社共通語は使用頻度の高い基本的な語であるが、教科によって使い方が異なるので、教科ごとの用例を示すことが重要である。

S1-04 (4).中国人日本語学習者と日本語母語話者の謝罪メールに対する評価 ―評価結果に著しい差異があったメールに注目して―

李嘉隆（名古屋大学大学院生）

本研究では、中国人学習者 70 名と日本語母語話者 68 名を対象に、謝罪メールに対する評価に関するアンケート調査を実施した。具体的には、両言語話者の間に評価結果の差異が最も著しいメールを取り上げ、そのメールの特徴を先行研究で挙げている評価観点に照らし合わせて評価の差異が生じる理由を検討した。その結果、先行研究で指摘されているように中国人学習者と日本語母語話者はそれぞれ【メールの書き方】、【日本語の表現】と【内容】といった異なる観点を重視して評価を行ったため、評価結果の差異が生じたと推測される。すなわち、本研究の結果は先行研究で挙げている評価特徴の存在を裏付けたといえる。

S1-05 (5).日本語学習教材における合成音声の実用性 ―「やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集」の実例を基に―

角南北斗（フリーランス）・黄海洪（京都大学大学院生）・中川健司（横浜国立大学）

音声コンテンツは言語学習の支援に有効であるが、現状では音声コンテンツを提供している日本語学習教材は多くはない。その理由の 1 つとして、音声の収録や編集にかかるコストが大きいことが挙げられる。筆者らの研究メンバーは、合成音声作成ソフト「VOICEPEAK」を用いて、ウェブサイト「やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集」に音声コンテンツを追加する試みを行った。その結果、作成にかかるコストを抑えながらも、実用的な水準の音声コンテンツを作成できることがわかった。日本語学習教材に合成音声を活用することは、すでに十分有効な選択肢であるといえる。

S1-06 (6).日本人就業者が外国人の同僚と仕事をした際の気づき ―日本人就業者の語りより―

大平真紀子（環太平洋大学）

本稿では、日本人就労者とその外国人同僚が円滑に働いている職場において、外国人同僚と働くことで日本人就業者にどのような気づきが起きたかについて、日本人就業者の語りの中から分析を試みた。このことは、外国人留学生が日本人の働き方やその際の心理を知り、仕事でのトラブルやミスコミュニケーションを回避するためにも必要なことである。その結果、外国人の同僚と一緒に働くことによって、違いがあることに対する緊張や戸惑いが薄れ、外国人とのコミュニケーションの新しい手法に対する気づきや日本人か外国人かは関係ないという気づきを得ることがわかった。

S1-07 (7).日本語学習者による感情の聴取 ―影響する要因を探る―

中林律子（愛知淑徳大学）

本稿の目的は日本語音声に表れる感情を日本語学習者（NNS）がどの程度聴取できるのか、どのような要因が聴取に影響しているかを見ることである。そのため、音声コーパスから選定した 85 発話についてポジティブ・ネガティブいずれの感情をもってなされた発話かを日本語母語話者（NS）22 名、NNS1-7 名に判定してもらった。NS の判定がほぼ一致した発話に対し NNS が同様の判定をしたケースを正答と仮定した場合、ポジティブ・ネガティブいずれかの正答率が低い NNS が目立った。一方、正答率に日本語レベルの影響はほぼ見られなかった。このことは、感情の聴取能力は自然に伸びるものではないことを示唆している。

S1-08 (8).日本語の流暢さの指標としての発音ゲームに関する一提案

鈴木基伸（大手前大学）・梅野由香里（大阪大学）

本研究では、出題者がテーマに沿った言葉をネコ語に変換し、それを聞いた人がその言葉を当てるという「ニャーニャーゲーム」が日本語の発音の流暢さを測る指標となりうることを主張する。このゲームを通して、学習者がネコ語をうまく話せないこと、ネコ語をうまく話せる人は日本語の発音も流暢であることがわかった。さらに、学習者が発話したネコ語を分析すると、拍数、特殊拍の選択（撥音・長音・促音の有無）、アクセントなどにおいての傾向が個人レベルで見られることがわかった。このゲームを通して、個人レベルの発音上の問題点を明確にすることができ、楽しみながら日本語発音の基礎を身に付けることができると考え、授業への導入を提案する。

S1-09 (9).ディスカッション・タスクのための語彙リストの試作

堀田智子（東北大学）

第二言語での意見交換や根拠の説明は容易ではないが、その原因の一つに語彙能力の問題がある。本稿では、日本語母語話者の使用実態をふまえ試作した語彙リストの概要を報告した。また、当該資料を用いた中上級日本語学習者によるミニ・ディスカッションでの使用語彙、事後アンケートおよびインタビューの回答に基づき、リストの有効性を検討した。調査の結果、定着が不十分な語や単語親密度の低い語の提示は、ディスカッション時の学習者の心的助けになるだけでなく、意見の効果的な伝達や、より深い話し合いを促進することが示唆された。本結果は、語彙リストが会話学習を支援する一ツールとなり得ることを示すものである。

S1-10 (10).中級日本語学習者を対象とした多読授業の実践報告

水野瑛子（名古屋学院大学）

本稿は、ある大学で実施した多読授業の実践を報告し、学習者の成果物から学習者の変化を考察することで、授業改善への示唆を得ることを目的とする。受講者は中級日本語学習者 3 名である。授業中は記録を書いてもらい、最後の授業で本の紹介と振り返りを行った。学習者の成果物から、回を重ねるうちに本の中の語彙に注目するようになっていったことがわかった。これは自分のレベルより高いレベル

の本を選択したことや、学習者の読解のスタイルが影響していると考えられる。今後は、多読と読解の違いについて教師と学習者で考える機会を設けることによって、教師の意図と学習者のニーズを双方が理解した上で授業を実施していく必要があると考える。

S1-11 (11).工学系留学生のための日本語入力練習教材の開発

松野美海・眞野道子・内山百合子・山本いずみ（名古屋工業大学）

本稿では工学系大学の日本語初級学習者のための Web タイピング練習教材の開発について報告する。本教材の特徴は①日本語の音韻のルールに則ったシステマティックな入力法を視覚的に提示していること②練習単語に工学系論文に頻出する単語を用いたことである。初級学習者達による試用の結果、小文字の判別の難しさ、音などの既存知識の影響による入力の誤りが見られた。試用後のアンケート調査の結果、満足度において 5 段階中 4.4 の高評価が得られたことから、本教材は工学系の学習者に一定程度受容されることがうかがえる。特に、動機付けと効果的な学習に寄与できると考える。

S1-12 (12).日本語クラスに参加した学生ボランティアの成長と変容 ―「社会人基礎力」を指標とした予備的考察―

田川恭識（日本大学）

日本大学日本語講座では、日本人学生がボランティアとして日本語の授業に参加する。ボランティアの授業参加については留学生から高い評価を受けており、またボランティアにとっても自己成長の機会となっている。本研究では、授業に参加したボランティアを対象に、ボランティア活動を通してどのように成長し自己変容したのかを明らかにするため、「社会人基礎力」を指標として予備的なアンケート調査を行った。その結果、相手に必要な情報を効果的に伝える力や、協働による課題解決の力などにはプラスの変化の傾向が見られたが、人間関係の構築に関係する力などにはマイナスの変化の傾向が見られた。

S1-13 (13).音読の繰り返しによる話す能力の向上 ―Microsoft Teams の「音読の練習」を用いた実践―

加藤伸彦（京都外国語大学）

本稿では、Microsoft Teams の「音読の練習（Reading Progress）」を用いた実践とその結果を、タスクの繰り返しという観点から報告する。筆者は、音読の 4 つの効果（リーディング力の向上、学習状況の把握と調整、スピーキング力の向上、学習項目の記憶定着）の面、およびタスクの繰り返しは音声面の向上の期待という面から本実践を行った。結果は、次の 2 点である。 1.同じ課題の音読の繰り返しにより、特に単語数の数値の上昇、つまり同じ課題を正しく話す速度の上達が見られた。 2.同じ課題文の音読を繰り返す練習でも、異なる課題文を正しく話す速度が上達する可能性があることが示唆された。

S1-14 (14).大学院生の研究室における交感的コミュニケーション―挨拶とそれに続く世間話に着目して―

居關友里子（国立国語研究所）

本研究では、大学院生が研究室で行っている交感的コミュニケーションのあり方の一端について、研究室の所属メンバーの挨拶やそれに続いてなされる世間話のやり取りに注目し、動画データの観察を行った。ここでは、あまり交流のないメンバー同士も、挨拶を交わし合うことに強く志向している様子が見られた。また、そこから世間話に移行するかに関しては、互いの反応を見ながら慎重に判断されていた。世間話を開始することは意外にも簡単ではなく、そのため研究室に不慣れな留学生はまずは無難な挨拶によって交感的コミュニケーションの機会自体を増やすこと、また、それらの非言語的振る舞いを含めた練習が有効であると考えられる。

S1-15 (15).理系 English Track の留学生に対するシャドーイングを用いた聴解力養成の試み

草刈明美（会津大学）

本研究では、N4 の聴解問題とシャドーイングを用いた聴解力養成の実践を報告する。英語学位プログラムにおいては、学内で日本語を使用する機会がほとんどない。また、すき間なく埋め尽くされたタイムテーブルの中に、継続的な日本語学習の可能性を認めにくい。 しかし、このような環境下においても、日本語学習を望む留学生は必ずいる。日本語学習の時間的制約、少なすぎるインプットと言語項目の不足、日本語の音声を発する機会の欠如。これらの解消のために、シャドーイングを用いた授業を行った。 6 回のテストとシャドーイングを交互に行い、その結果を考察してみると、既出の言語項目を含む割合が高いほど、正解していることが明らかになった。

S1-16 (16).留学生別科における Google Classroom 導入の試み ―学生の反応と教員の反応―

宮口徹也（岡山理科大学）

コロナ禍であったここ数年は、日本語教育においても ICT を活用した授業が一挙に普及したが、各領域で DX 化が進められる中、ICT 利用のニーズは今後もさらに高まると予想される。そこで岡山理科大学留学生別科では大学全体で Google Classroom が利用可能となった 2022 年度を機に、筆者が中心となり同プラットフォームの授業への導入を試みた。導入後、学生にアンケートを実施したところ、ほとんどの学生が日本語学習に役立ったと回答し、授業での Classroom の利用に対し肯定的な反応が多く見られた。一方で、他の教員による Classroom の利用は進まず、教員間での ICT 活用に対する意識の差やリテラシーの格差が導入を阻んでいることが窺われた。

S1-17 (17).教科書における複合辞「きっかけ」に関する一考察

川橋葉子（横浜国立大学大学院生）

「きっかけ」は名詞として使用する場合、ほとんど非文がないものの、複合辞として使用する場合、日本語学習用教科書の文法説明に従い作文しても、非文となる場合がある。本稿では＜X をきっかけに（して）＞に焦点を当て、日本語学習用教科書における文法・用法説明を検証した。また、日本語非母

語話者の作成した＜Xをきっかけに（して）＞の文を基に、複合辞「きっかけ」を使用した文に関するアンケート調査を行い、非文となる原因と訂正について明らかにした。さらに、その教科書の検証とアンケート調査の結果を基に、複合辞「きっかけ」を正しく使用するために日本語学習用教科書に追記すべき事項について考察する。

S1-18 (18).中国人日本語専攻大学生が好む日本語教育系動画の特徴 ―初級日本語ブレンド型授業における予習動画の開発に向けた予備調査として―

陳喆（東京都立大学大学院生）

中国では教育体制改革の深化とともに、教育現場での革新、特に現代の情報通信技術、オンライン環境を利用したブレンド型授業が提唱されてきた。ブレンド型授業の主な形は「オンライン講義動画＋対面授業」である。しかし、学生が好まないオンライン講義は見てもらえないのが現実である。本研究は中国人大学生日本語専攻生を対象に、アンケート調査を用いて、学生が好む日本語講義の動画の特徴を解明した。アンケート調査の回答を分析した結果、「字幕」「音声」「説明方」「先生」「インストラクション」「動画の時間」という6つの要素が中国人大学生の日本語教育系動画に対する感想に影響を与えていることがわかった。

S1-19 (19).学習者の多様性に対応した日本語科目の受講レベル決定プロセス

榎原実香・佐藤礼子・山元啓史（東京工業大学）

東京工業大学では、日本語科目のプレースメントテストとして学習内容を4択で問う語彙文法テストと聞き取った文中の空欄1-3文字をタイプするLEAPの2種類がオンラインで実施されている。しかし、学習者の多様化により、テスト結果のみでは受講レベルを決定できないケースが増えてきている。テスト後の面談では、LEAPのレベルが語彙文法テストのレベルよりも高かった学習者から、1)語彙文法テストの問題、2)誤操作等トラブル、3)独学、4)日本語リソースの影響、5)過度のLEAPテスト対策の5つの傾向が見られた。テストの結果を面談によって補うことで、多様な学習者へのアフターフォローが可能な、効率的かつ実現可能性の高いテストプロセスの可能性が示唆された。

S1-20 (20).中国での日本語スピーチ大会指導で日本語母語話者教師が感じた迷い ―協働で省察を行ったある教師の語りの分析から―

山田茜（東京外国語大学大学院生）・細井駿吾（クアラルンプール大学）・末松大貴（名古屋大学大学院生）

中国の日本語教育における日本語母語話者教師の役割のひとつに、スピーチ大会に向けた指導がある。 本研究は、中国の異なる教育機関でスピーチ大会指導を行った3名の日本語母語話者教師が協働で省察を行った活動を対象に、そのうちのある教師の発話を質的な分析方法で分析し、スピーチ大会指導を通して感じていた困難や迷いを調査したものである。調査の結果、日本語母語話者教師がスピーチ大会指導において感じる困難や迷いとして、【原稿を修正する程度の調整】【「良いスピーチ」以外の要素の指導】【学習者や教育機関の要望への対応】【個々の学習者に合った指導】の4点が示された。

S1-21 (21).講義聴解力育成のための専門日本語クラス試案―専門語彙に着目して―

佐々木幸喜・阿久澤弘陽・河内彩香（京都大学）

本稿では、大学学部進学を目指す予備教育生を対象とした専門語彙授業を報告する。学習者の専門は様々であるため、日本の中等教育の教科書にあるトピックを話題として採用し、実践では、ノートテイキングと意味交渉に重点をおいた活動を取り入れた。これらの活動を通じ、未知語でも、平仮名でメモするような場面が徐々にみられるようになった。音声をもとに、辞書を引く練習にもなったと考える。また、個人では再現が難しかった語彙でも、グループであれば再現可能なことが確認できた。さらに、話し合いにおいて漢字や語句の説明といった産出機会が確保でき、専門科目の演習でのディスカッションにも備えることができたと考える。

S1-22 (22).上級日本語学習者の文法項目に対する認知度と誤用の関連について

加藤恵梨（愛知教育大学）

本研究の目的は、「1 ～がちになる、2 ～かどうか、3 ～ことだろう、4 ～しか～ない、5 ～せいか、6 ～といえば、7 ～とはいえ」という 7 つの文法項目についての上級日本語学習者の認知度と、それらを使って文を作った時の誤用の生じやすさに関連があるのかについて調査することである。調査の結果、7 つの文法項目についての学習者の認知度と、誤用の生じやすさには関連があまりないことがわかった。また、「～ことだろう」のように、「～だろう」の意味や用法をわかっているから「～ことだろう」もわかっていると学習者が考えると誤用が生じやすいため、指導する際に注意が必要であることも述べた。

【午後の部】

●口頭発表（２件）

S2-01 (23).仕事に必要な日本語とビジネス日本語能力の評価 ―外国籍社員と日本人社員の比較―

鈴木綾乃（横浜市立大学）・淺海一郎（内定ブリッジ株式会社）

本発表は、外国籍社員と、当該外国籍社員と一緒に働いている上司・同僚を対象に行ったアンケート調査から、業務における日本語の必要度およびビジネス日本語能力評価について分析したものである。分析の結果、日本語が必要な業務については、おおむね外国籍と上司・同僚で一致していたが、外国籍社員の必要度が低い一方、上司・同僚は日本語で行うことを求めていた項目もあった。外国籍社員は「今必要ない（今その業務をしていない）」と回答した一方で、上司・同僚は「本当はやらせたいが任せていない」と考えられる。能力評価については、外国籍社員の自己評価と、上司・同僚の評価が一致していた項目と、大きく差があった項目があった。

S2-02 (24).多様な言語文化背景を持つ年少者学習者の協働活動の変容 ―発達段階ごとにみた日本語力のレベル差のある学習者同士の関わり合い―

河野あかね・白田千晶・三木杏子・秋本瞳（つくばインターナショナルスクール）

学習者は教師の助けや協働による友人との助け合いにより、授業を理解したり活動に参加したりしている。当校では、クラス内における学習者の多様な言語文化背景および日本語力のレベル差を肯定的に捉え、かつ各学習者の日本語力の向上を目指す授業に取り組んできた。本研究では、年少者学習者の協働活動への参加の仕方およびやりとりの変容について、縦断的に分析した。発達段階が進むにつれて協働活動の経験が増え、最終的には日本語力に関わらず学習者同士が対等な関係で、教師の介入なく主体的にやりとりに参加できるようになることが示唆された。

●ポスターセッション２（上記を含む 22 件）

S2-03 (25).日本語学校の留学生と日本語母語話者大学生との交流 ―オンラインでの哲学対話実践の試み―

古田梨乃・山田航司（大阪みなみ日本語学校）

哲学対話とは、正解のないテーマについて対話することで考えを深めていくものであり、異文化理解の促進が期待できる活動である。本実践では、普段教室外で日本人と交流する機会の乏しい日本語学校の留学生と、普段留学生と接することがない日本語母語話者大学生とをオンラインで結び、哲学対話を行った。この取り組みを通し、留学生においては実際に日本語を使用する機会になったとともに、互いの共通性や相違性について認識することができた。日本語母語話者大学生においては、留学生と同様の気づきを持てたことに加え、異文化交流することの意義を見出したと考える参加者もあった。

S2-04 (26).日本語教育と専門教育の接続の可能性 ―小規模大学専門教員に対するインタビュー結果の分析―

阿久澤弘陽（京都大学）・岡村佳代（聖学院大学）・黒﨑佐仁子（聖学院大学）・前川孝子（聖学院大学）

本発表の目的は、小規模大学で専門科目を担当する教員が、日本語教育と専門教育の接続についていかなる認識を持っているのかをインタビュー調査によって明らかにするものである。調査の結果、「専門教員と日本語教員のコミュニケーション」「役割分担」「日本語カリキュラム」「授業外支援」などに関する専門教員の認識が得られた。これらの結果に基づき、日本語教育と専門教育の適切な接続には、日本語教員と専門教員のコミュニケーション機会の増加、実際の教育における効果的な役割分担のさらなる検討、日本語カリキュラム設計の再検討、授業外支援システムの確立などが必要であると論じた。

S2-05 (27).言語・学習ストラテジを共有する入門期日本語コースの開発

佐藤礼子・山元啓史（東京工業大学）

日本語入門期において日本語・文化・言語学習への気づきを促す授業を実践し、授業に対して学習者がどう考え、どのような気づきを得たかを検討した。授業の基本方針は、1. 日本語・文化・言語学習について話し合う、2.現実の言語を学ぶ、3.内容を重視する、の 3 点であり、日本語会話以外は英語で実施した。本授業を通して、学習者は多様なストラテジがあることを知り、学び合いを通して効果的ストラテジが何かを検討できた。また、短い会話を練習する活動で日本語を学習する目的が明確になったと考えられる。さらに、心理的安全性が確保されたことや他の学習者と交流する機会が多いことを肯定的に感じていることが示された。

S2-06 (28).「伝えるために書く」ことを目指した作文授業の試み―日本人大学生を教室外の読み手として―

本間妙・中林律子・山本裕子（愛知淑徳大学）

JLPTN2 レベルの学習者が教室外の読み手を意識し「伝えるために書く」ことを目指し書いた意見文について日本人大学生にコメントをしてもらい、それを参考に推敲する活動を行った。学習者は書く過程で読まれることを想定しながら「説得力」「反論の想定」「論じる範囲の設定」他等のポイントを学び、日本人大学生にはその学習内容に合わせて見るべき点を示した。その結果コメントの多くがポイントを具体的に押さえ推敲に活かせるものになった。また、活動後の振り返りでは多くの学習者がコメントを好意的に受け止め教師以外が読むという活動を肯定的に捉えていた。書くことに対する学習者の内発的動機付けを高めることに繋がる活動をすることができた。

S2-07 (29).日本語授業に於けるサポート学生の役割について ―教師へのアンケート調査から―

荻原まき（桜美林大学）・鈴木美穂（目白大学）・高橋恵利子（防衛大学校）

大学等の留学生対象日本語クラスでは、在学中の日本人学生が留学生の日本語学習を支援する取り組み（以下、サポート学生）がある。本研究では日本語教師 50 名を対象に、サポート学生の活用に関する質問紙調査を行った。調査の結果、多くの教師がサポート学生を活用しており、特に、会話練習のパートナー、同世代のリアルな日本（語）のリソースとしての活躍を期待していることが示された。さらに、日本語学修支援だけでなく、留学生とともに学ぶ学生として授業に参加することを求める声もあった。一方、サポート学生のトラブルとして「無断欠席、遅刻」が多く挙げられ、教師の負担となっていることが分かった。

S2-08 (30).日本語中上級クラスにおける作文を活用した多読活動の実践

稲田栄一（立命館アジア太平洋大学）

本発表では、日本語中上級クラスにおいて実践した「作文を活用した多読活動」の概要とその効果を報告する。本発表における多読活動とは、授業内で学生全員が書いた作文を読み物として利用し、多読を進めていくというものである。活動後に提出された振り返りシートの記述から、読み手はクラスメー

トの作文に興味を持ちながら読書が進められるという利点や、同じ日本語レベルの学生が書いた作文は適度な難易度の読解教材として活用可能であることがわかった。また、自身の作文を教師以外の他者に読まれる経験により、作文学習に対するモチベーションが上がったという意見もあり、本活動が学習者の動機づけを促進するのに有効であることが示された。

S2-09 (31).中上級日本語学習者の音読・シャドーイングに対する意識と取り組み―朗読コンテストの評価と質問紙調査の探索的分析―

渡邊知釈（群馬大学）

統制されたプラクティスとしての音読とシャドーイングは学習効果がある反面、あらかじめ用意されたテキストの口頭再現は単調で退屈と感じられることもある。一方、同様のテキストの口頭再現である文学作品の朗読は、CEFR では「美的な言語使用」として位置づけられる。本研究では日本語中上級学習者を対象に、音読・シャドーイングを授業内外のプラクティスとして課し、あわせて、詩や小説などの朗読を言語活動として組み入れ、参加者のこれらプラクティスに対する意識・取り組みについて探索的な調査を行い、朗読発表のパフォーマンスとの関連を調べた。プラクティスへのポジティブな意識や取り組みは朗読のパフォーマンスと相関せず、一部に負の相関が見られた。

S2-10 (32).身体表現を重視した音読劇 ―昔話をテキストとして―

伊吹香織（淑徳日本語学校）

自己や他者の身体、またそれらを取り巻く環境を用いて日本語を理解し表現するために、中上級レベルで行った音読劇の実践について報告する。音読劇は、脚本を手にして読む声の表現活動であるが、本実践では身体を通して理解を深めるというプロセスを重視した。発表後に行った振り返りの分析から、昔話を使用した音読劇が、多様な日本語への理解を深める活動として有効であることがうかがえた。また、物語や登場人物に対する理解を深化させ、日本語の表現とイントネーションや感情、動作とを連動させる大切さへの気づきも得られた。身体表現によって理解や解釈が可視化される音読劇は、日本語の理解を深化させ、口頭表現能力を高める活動として期待できる。

S2-11 (33).「だんだん」と「ますます」の使い分けに関する考察―『筑波ウェブコーパス』の分析より―

成清萌花・劉悦・陳偉強（筑波大学大学院生）

本研究では、日本語の副詞「だんだん」と「ますます」の使い分けについて考察した。『筑波ウェブコーパス』では、「増える」という動詞が「だんだん」と「ますます」の両方で最も多く共起していることから、「だんだん増える」と「ますます増える」それぞれの意味について分析した。その結果、「だんだん増える」は、起点となるときの状況に関わらず漸次的に増える様子を表し、「ますます増える」は、起点となるときを軸に、それ以前から数が多い状態或いは増えている状態を前提として、漸次的に増える状態或いは一気に増える状態を表す。そのため、「ますます」は配慮表現としても機能すると分かった。

S2-12 (34).聞き手の応答要求発話による自己開示 ―日中母語話者同士の初対面会話を比較して―

呉凌波（名古屋大学大学院生）

良好な人間関係の構築には、人間関係形成の初期段階である初対面会話が重要である。初対面の場合、会話参加者は互いについて知っていることが少ないため、情報収集を目的とした相互行為が必要となる。本研究は、聞き手の応答要求発話とそれ以降の話し手の自己開示について、日本語母語話者（JN）と中国語母語話者（CN）の行動を比較した。その結果、CN の聞き手は積極的に被質問者に新情報を求めるため、新情報のやり取りが積極的にされているが、JN の聞き手は、ほのめかした情報要求発話を多く使うため、情報が少しずつ交換されていることがわかった。

S2-13 (35).日本語の助言場面における人間関係の管理 ―ラポールマネジメントに基づいた母語話者と中国人日本語学習者の分析を通して―

宋凌逸（名古屋大学大学院生）

「助言」は、「相手に感情移入し、相手と共感する行為で、肯定的に見られる文化（東 2011：128）」と言われることから、良好な人間関係を築く上で重要な役割を果たすと考えられる。しかし、Spencer-Oatey（2000）によるラポールマネジメント理論では「助言」は相手の「不当に押し付けられたり、都合よく利用されたりはしない」という「公平の権利」を脅かし、人間関係に摩擦を生じさせる恐れがある。そのため、本研究では、日本語母語話者（JN）との比較を通し、中国人日本語学習者（CJL）は 友人に助言する際にどのように人間関係を管理しているかについて明らかにしたい。JN と CJL の共通点と相違点を検討することで、日本語教育への示唆を得ることを目的とする。

S2-14 (36).コロナ禍における日本語学習者の心理的不安の変化 ―来日前と来日後の PAC 分析による調査を通して―

許明子（名古屋大学）・孫芳兵（名古屋大学大学院生）・謝カン月（名古屋大学大学院生）・西澤萌希（名古屋大学大学院生）・朱雅蘭（名古屋大学大学院生）

本研究は、コロナ禍の時期に中国から日本へと留学した留学生が潜在的にあるいは顕在的に抱える「不安」を PAC 分析の手法を通して明らかにしたものである。文系大学院に在籍している 3 名の中国人留学生を対象に、来日前と来日後に PAC 分析を行い、不安がどのように変化したのかについて分析を行った。その結果、次の 3 つの変化が明らかになった。第一、来日前の日本社会への帰属に対する期待感が来日後は新しい環境による生活・勉学への不安に変化した。第二、来日前のオンラインによる研究環境に対する不安が外国人としての生活、手続き等の不安に変化した。第三、来日前の研究や学業に対する不安が生活面、経済面への不安に変化した。長期化しているコロナ禍において留学生不安が変化しており、適切な支援が必要であることが明らかになった。

S2-15 (37).コーパスツールを用いたライティングのための教材開発

寺嶋弘道・板井芳江（立命館アジア太平洋大学）

コロケーションやそのコロケーションと共に使用される文法項目を調べることができるコーパスツールは、日本語学習者がライティングに活用できるツールである。しかし、学習者がそれを活用することは簡単ではないため、筆者らはコーパスツールの使用法を学ぶためのウェブサイトを開発している。本稿ではその開発について報告する。本サイトは、7 つのビデオレッスンと 6 つの練習・タスクのページで構成され、早い段階からコーパスツールが使用できるように、CEFR の B1 レベルを目指す学習者の利用を想定している。また、「ライティングにおけるコーパスツール活用モデル」の考え方を基に開発している。

S2-16 (38).日中接触場面における中国人日本語学習者の調整行動 ―日本語母語話者との意味交渉に注目して―

龔詩雅（名古屋大学大学院生）

本研究は日中接触場面の意味交渉に注目し、中国語を母語とする日本語学習者がどのように積極的に調整行動を行ってうまくコミュニケーションするのかを形式と内容の 2 つの面から考察した。日中接触場面の会話データを分析した結果、中国人日本語学習者は日本語母語話者と比べると、選択した調整行動の積極性と工夫度が少し低いが、様々な調整行動を多用することで、相互理解を促進し、説明する内容の広さと話題の深さを上げることがわかった。本研究の「調整行動」は、日本語母語話者と中国人日本語学習者が意味交渉をするとき、円滑なコミュニケーションを妨げる語彙や意味の理解の困難に対して行う行動と定義する。

S2-17 (39).介護福祉士国家試験における漢語表現の調査―フォーミュラ研究の観点からの分析―

黄海洪（京都大学大学院生）

日本の介護現場で働く非漢字圏出身の外国人介護人材が増加傾向にあり、国家試験に合格できるような漢語知識を身につけるための支援が急務となっている。本研究は、外国人介護人材の漢語理解を促進させるため、第 24 回から第 33 回までの介護福祉士国家試験データを対象に、試験に出現する漢語表現をフォーミュラ研究の観点から分析を行なった。三種類の形態素解析辞書を用いて、三字以上の「漢語フォーミュラ」の抽出を試みた。試験問題からは、「日常生活動作」のような特徴語が抽出された。また、「愛着障害」のような新語が見つかった。本研究の結果から、二字漢語の専門用語以外にも、三字以上の特殊語や新語の教育が重要であることが明らかとなった。

S2-18 (40).外国人住民の声を反映させた多言語・多文化活動 ―外国人住民に対する調査とイベントの実践報告―

友宗朋美（筑波大学大学院生）・樋口尊子（NPO 多言語・多文化サポート ICHI）

本発表は、外国人住民に対する聞き取り調査と、調査の結果を反映させて企画・実施した多言語・多文化イベントの報告である。これらの活動の実施は、日本語支援だけではなく、地域に暮らす外国人住

民の声を聞き、その声に応える必要性を感じた点に端を発している。まず、筆者らは、大規模調査では見えない外国人住民の声を聞き取る調査を行った。その結果、国の習慣や相手の立場への理解、行事やボランティアをしたいなどの回答があり、それをもとにイベントを企画・実施した。イベントの振り返りから、参加者は外国人住民への理解を深め、彼らの視点で考えるきっかけとなり、距離が縮められたことがわかった。また、イベントの実施が外国人住民の積極的な参加の機会となった。

S2-19 (41).スリランカ人日本語学習者における日本語の自動詞と他動詞の学習 ―導入方法に着目して―

ダサナーヤカ　オーシャディ（大阪大学大学院生）

スリランカ人日本語学習者を対象に、初中級レベルの教科書や授業などにおいて自他動詞が実際にどのように導入されているかについて検討を行った。そこで、スリランカの日本語教科書『サチニさんといっしょ』を分析し、実際に行われる授業でどのように自他動詞が導入されるかを観察した。その結果、『サチニさん』では単独の課として自他動詞が取り上げてられていないが、教科書全体で数多くの自他が導入されることが分かった。教師はその点を補完するため授業において学習者にとって自他の区別に意識を向ける様々な工夫をしていた。最後に、実際の授業における自他動詞の導入方法が、学習者の自他動詞の使用傾向に影響する可能性があることを指摘した。

S2-20 (42).「できたこと」の振り返りの記述内容の分析―愛知県内のある大学での実践から―

末松大貴（名古屋大学大学院生）

本研究は、筆者が愛知県内のある大学で行った「できたこと」の振り返りの実践を対象として、学習者の振り返りの記述内容を分析したものである。「できたこと」の振り返りは、先行研究を参考に、「感情」「数値」「他者の反応」の 3 つの項目に分けて振り返りを書くように指示した。実践に参加した 4 名の学習者の記述を分析した結果、3 つの項目について、（1）それぞれの項目で別々の経験を書いている、（2）複数の項目で同じ経験の異なる側面について書いている、以上 2 つの記述のパターンが見られた。この結果と先行研究から、「できたこと」の振り返りは、初期の段階から深い振り返りを行うことにつながることが示唆された。

S2-21 (43).日本語学習番組「ひきだすにほんご」を活用したオノマトペ指導の試み

石山友之（国際交流基金日本語国際センター）

本研究は日本語学習番組「ひきだすにほんご」を活用して行ったコミュニケーションのためのオノマトペ指導について報告するものである。授業は海外の日本語教師対象の教師研修の中で行われた。授業後に行った授業評価アンケートの結果、参加者の授業に対する満足度は高く、参加者が授業外でオノマトペを使うようになったという変化が起きたことがわかった。このことから「ひきだすにほんご」及び本実践はコミュニケーションのためのオノマトペ指導に効果があったと言える。一方、自律的に学べる、映像内の会話が学習のゴールという位置付けであるという映像の構成や特徴を参加者によく理解してもらう必要があることがわかった。

S2-22 (44).「助言」談話の＜意味公式＞試案

辻本桜子（愛知淑徳大学）

本研究では発話行為のうち、これまでにあまり研究が進んでいない「助言」を対象に、「助言」談話を分析するための＜意味公式＞の試案を作成した。作成時には、森本（2005）の＜意味公式＞と辻本（2008）の自由記述欄の独自分類を参考にした。この試案でもっとも工夫した点は「明示的 / 非明示的助言」の定義の見直しと「コア助言」の導入をしたことである。作成した＜意味公式＞は、大きく次の 4 つのパートからなる。Ⅰ．助言を誘発する状況の明確化、Ⅱ．助言、Ⅲ．助言の周辺発話、Ⅳ．その他。そして、全部で 19 の下位分類を設けた。

●ポスターセッション 3（22 件）

S3-01 (45).日本語教員養成課程の学部生の自律学習に対する支援観の形成―台湾の大学で実施された契約学習のオンライン支援から―

桒田晶（桜美林大学学部生）・桂莉奈（桜美林大学学部生）・喜多梢（桜美林大学学部生）・原綾花（桜美林大学学部生）・大友絵理（桜美林大学学部生）・内山喜代成（桜美林大学）

本研究は日本語教員養成課程の学部生がどのように自律学習に対する支援観の形成したのかを探った当事者研究である。学部生は台湾の A 大学で行われた契約学習という授業をオンラインで支援した。分析の結果、学部生は支援開始当初はこれまでの留学生支援の経験から「対等」な関係を重視しながらも、学習者の契約内容が JLPT の勉強であったことから日本語を「教える」という自身の役割を強く意識していた。しかし、支援を進める中で未だ教師ではない自分が教える不安を覚える。そこで、他の支援者との議論から安心感と活動のヒントを得て、自身の支援方法を見直し、試験勉強であっても、支援者と学習者が共に考える進め方へ変えていった。支援の進め方を探る中で自身の役割も学習者と「感情を共有できる相手」へと変化していった。

S3-02 (46).作文支援システム「さくら」の開発 ―フィードバック方法の改善―

金蘭美（横浜国立大学）・金庭久美子（立教大学）・川村よし子（元東京国際大学）

本稿では、作文支援システム「さくら」について、開発の背景、システムの特徴および運用実験から明らかになった課題と改善点について報告する。本システムは、日本語学習者が初級レベルから段階を踏んでメール文の練習ができるシステムを目指して開発したものである。まず、レベル別（初級・中級）メール文タスク（16 種類）を作成し、「データ収集システム」を開発、基礎データの収集を行った。その後、作文支援システムを開発し、基礎データから抽出した「誤使用リスト」と「必須表現リスト」を搭載、運用実験を行った。そこから、必須表表現リストと誤用リストのタグ、分類基準を見直し、アドバイスの仕方をレベルに合ったものに変更した。

S3-03 (47).日本語演習授業におけるアフレコの実践

鈴木美穂（中台科技大学）

本学の応用外国語学科の学生は、日本語を副専攻として学習している。学生の日本語能力に差があり、特に演習授業を設計することが難しい。そこで、異なるレベルの学生でも参加できる方法として、アフレコを採用した。本研究では、アフレコ実践の内容を記録し、その学習効果について検証した。対象者は 8 名の台湾人大学生で、レベルは初級から中級であった。アフレコの学習効果を図るため、学習への影響、学習意欲の変化、アフレコの利点と困難に感じた点について学生に自由記述で回答してもらった。結果、発音やイントネーションの改善、学習意欲の向上がみられた。また、日本語で感情を入れて表現することの難しさが明らかになった。

S3-04 (48).中国語と日本語の逐次通訳の過程における切替能力の影響　―上級学習者と通訳学習者の比較から―

宋啓超（広島大学大学院生）

本研究は通訳指導に理論的根拠を提供することを目的とし、中→日逐次通訳の遂行過程における一般認知機能の一つである切替機能の影響を検討したものである。具体的には、中国人上級日本語学習者及び中国の大学院に在籍している一学年の専門的通訳訓練を受けた通訳学習者を対象に、通訳材料の難易度を操作し、実験的検討を行った。その結果、1）切替能力が通訳の遂行に関わっており、切替能力が高いほど、通訳の遂行成績が有意に高かったこと、2）上級学習者よりも、通訳学習者のほうへの影響効果がより大きいことが明らかとなった。これらの結果から、今後の通訳教育現場における一般認知機能の訓練も必要不可欠であることが示唆される。

S3-05 (49).ロールプレイを用いたディスカッション授業の効果と留意点に関する考察 ―「ケースメソッド」によるより深い学びを目指して―

アドゥアヨムアヘゴ希佳子（宝塚大学）・鈴木綾乃（横浜市立大学）

本研究では、ロールプレイを用いた日本語学習者用のケースメソッド授業の効果と留意点について論じることを目的とした。学習者がケース（問題発生事例）の登場人物 A、B になりながら、B が部屋を掃除しないという問題についてディスカッションを行った授業の文字化資料を、ロールプレイの効果と留意点という観点から分析した。その結果、ディスカッションが活性化しやすい、より深い結論に達しやすいという 2 つの効果が示された。また、ロールプレイの役になりきってもらう、想像・推測を入れてもよい部分かどうか教師が明確に指示する、ロールプレイ中に発言されないメタ的な考えをディスカッション中に記録させるという 3 つの留意点が明らかになった。

S3-06 (50).地域と連携した日本語プレゼンテーション授業の実践―地元商店街のお惣菜店とのコラボレーション―

山田航司・古田梨乃（大阪みなみ日本語学校）

我々の日本語学校の留学生と地域の人々は普段交流する機会にめぐまれていない。両者の交流の機会をつくるために、地域の商店街のお惣菜店とコラボする授業を行った。留学生がグループになって、料理をプレゼンし、一番魅力的だった料理を商品化するというプロジェクトである。その結果、客層、価格帯、値段や味付け、さらには材料の入手のしやすさなどを店主にアピールしたグループの料理が商品化することとなった。これを行った結果、学生は日本語を実際に使用するいい経験となったとともに、地域の人々に受け入れてもらうという経験をすることができた。また、これ以降、商店街からボランティアの要請が日本語学校に届くようになった。

S3-07 (51).シャドーイングにおけるテキストの視覚呈示が日本語学習者のアクセントに及ぼす影響

張暁雨（東京工業大学大学院）・佐藤礼子(東京工業大学)

本研究では、中国語を第一言語とする中級日本語学習者のシャドーイングにおいて、テキストの視覚呈示が発音（特にアクセント）に及ぼす影響を検討した。情報呈示方法およびアクセント型によって、シャドーイング練習における発音の学習効果が異なる可能性がある。調査では、中級日本語学習者 46 名の参加者を対象に、テキストの視覚呈示なしとありの 2 種類のシャドーイング練習法を実践させ、4 種類のアクセント型のターゲット語の発音の学習効果を比較した。分析の結果、シャドーイングによる発音の学習効果はアクセント型によって異なることが示された。

S3-08 (52).活動集を活用した初級における授業外国際交流活動の実践 ―初級学習者のための教師による学習支援―

河内彩香（京都大学）・村田晶子（法政大学）・長谷川由香（法政大学）

筆者らは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で 2020 年春学期からオンライン授業に移行し、学習支援と国際交流を目的として、国内学生と国内・国外留学生の授業外交流活動のための活動集の開発を始めた。対面授業が再開してから、活動内容の見直しと対面・オンライン双方で使用可能な教材への転換を図った。本活動集は初級日本語総合クラスと有機的に連携させたもので、言語学習の伸長と学生間のつながりの強化を目指す。本研究は、本活動集を活用して、初級の学習者が授業外国際交流活動における教師の学習支援を分析する。また、活動集を使用した学習者へのアンケート結果から、学習者の学びと活動集の課題を考察する。

S3-09 (53).日本語教育関連学会・研究会運営時の狙いと留意点について

中川健司（横浜国立大学）

コロナ禍の影響で 2020 年半ばからは多くの学会がオンラインで開催されるようになり、2022 年になると、対面式で行われる学会も増えてきた一方、オンライン開催を継続する学会も一定数ある。対面式で行うしかなかった以前とは違い、学会開催の選択肢が増えていると言える。学会は日本語教育の実践

や研究によって得られた知見を共有する場であるが、運営のしかたによって、機能のしかたは異なる。日本語教育の実践や研究の質を高めるためには、学会運営に関する知見の共有を進める必要があるのではないだろうか。本発表では、筆者が過去に運営を担当した、３つの学会に関して、それぞれの課題とそれを克服するためにどのようなことに留意したかを述べる。

S3-10 (54).学生による日本語多読のための読みもの作成プロジェクト ―１年間の実践より―

作田奈苗（聖学院大学）

日本語教育において多読が普及するのにともなって、多読のための読み物作成の活動も広がっている。本論は、日本語教員養成課程の学生など、留学生を含む学生たちが協働で読み物を作成したプロジェクトワークの１年間の活動の報告である。筆者の観察と学生へのインタビューによると、学生たちは活動を楽しんでおり、役割分担から学んだり、真剣な議論に充実感を感じたりしていた。ただし、活動には、時間の余裕や、意欲の低下に対する対策も必要である。また、作業過程で学生から日本語教師の助言が求められるため、教師の側にも読みもの作成の経験が必要である。したがって、プロジェクト実施には一定の条件が必要であると言える。

S3-11 (55).中国人日本語学習者の要約文に見られる誤用 ―顕在的な要素を中心に―

朱雅蘭(名古屋大学大学院生)

要約は理解した元の文章や談話の内容の主旨をより少ない言語分量で再構成し、簡潔に表現することが求められ、日本語教育の現場においても要約文を作文練習の一環として取り上げ、様々な角度から研究が推進されている。しかし、現在、中国人日本語学習者を対象とした要約文調査では学習者の要約過程に現れた問題点を考察する研究は少ない。本研究では文章論の構造分析理論に基づき、中国人日本語学習者の要約文に現れる誤用を分析し、要約文作成の問題点を中心に考察を行った。その結果、特に、社説のような論理構造が複層化している文章を取り上げる際、学習者に原文の文章構造を意識するように指導することが重要であると考えられる。

S3-12 (56).やさしい日本語への書きかえ困難点に関する基礎調査

安藤句美子(桜美林大学)

筆者は大学でやさしい日本語に関する講義、やさしい日本語への書きかえ演習を行っている。本稿では、教室活動の改善を目的に、科目履修前後のやさしい日本語への書きかえに見られる変容を調査した。この調査の結果からは、わかりやすくするためには語の書きかえが必要だという認識はあるものの、どの語を書きかえ対象とするかの判断は学生にとって難しく、ツールも十分に活用されていないことがわかった。また、文章全体の構成の見直し、漢字のルビ振り、分かち書き、イラストや表の使用については多少改善したものの、課題が残る結果となった。最後に、これらの結果から明らかになった書きかえ困難点をもとに授業改善方法について考察した。

S3-13 (57).日本語教育実習における教師教育者の振り返り―教師教育者の成長を促すー

河野俊之（横浜国立大学）

発表者は直近の実習において、従来と異なる日本語教育実習を指導した。本実習は、技能実習生に対して、オンラインで行うもので、学習者が入れ替わるため、同じ課を教えることで、実習生の改善案を活用できると考えた。しかし、実際には、1）語等のコントロールが不十分である、2）教材を膨らませることができない、などの課題がいつまでも残った。「自己教育力」の向上は十分ではなかったことから、実習以前の授業等でも「自己教育力」の向上を目指す活動を増やす必要があることのほか、「自己教育力」を向上させるにはどうしたらよいかを実習生自身が考える活動をより明示的に行う必要があると考えている。

S3-14 (58).インドの日本語学習者のためのヒンディー語に基づいた連想法によるひらがな教材の作成
―語の選定のためのアンケート調査用紙の作成について―

目黒裕将（エイム奈良国際アカデミー）・羽持悠希（一橋大学大学院生）・井元麻美（京都外国語大学大学院生）

ひらがなやカタカナを導入する際の方法の一つに学習者の母語に基づいた連想法があり、これまで英語、タイ語、スペイン語、中国語を基にした教材の作成が行われてきた。しかし、ひらがな教材作成の際の語の選定、教材作成の手順まで詳細に記述されたものは管見の限り見られない。また、ヒンディー語による連想法を用いたひらがな教材作成も管見の限りなされていない。そこで、本稿では、デリー・デリー近郊の初中等教育機関の 6 年生を対象として、連想法によるひらがな教材作成のための語の選定をするためのアンケート調査用紙を作成する手順を示す。

S3-15 (59).日本語教科書におけるカタカナ語の出現率

プラワン　コンマパット（早稲田大学大学院生）

本稿は日本語教科書におけるカタカナ語の出現率と教科書の特徴を明らかにする目的で調査を行った。初級、初中級、中級、上級の日本語教科書合計 85 冊を対象とし、各教科書全体の語彙に対するカタカナ語の出現率を求めた。その結果、カタカナ語の出現率（異なり語）は、初級の日本語教科書が 6.44%で最も高いが、教科書の場面によって差が見られた。さらに、カタカナ語の出現率、及び一語当たりの使用度数で階層クラスタ分析により教科書をグループ化し、教科書の特徴について考察した。その結果、日常生活の場面で会話文が多く含まれている教科書、特に出版年が新しい教科書はカタカナ語の出現率、及び一語当たりの使用度数が高い傾向が見られた。

S3-16 (60).「アテレコ・ワークショップ」の試み ―アニメを活用した授業の一案として―

小松満帆（立教大学）

日本のアニメ・マンガはサブカルチャーコンテンツとして世界に広く知られており、日本語学習者の中にはアニメ・マンガを学習の契機・動機としている者が少なくない。しかし、日本語・日本文化教育の現場では、アニメやマンガを活用した実践報告は十分とは言えず、活動のバリエーションも限られて

いるのが現状である。本稿では、新たな活動の一案として、「アニメ・アテレコワークショップ」について報告する。ワークショップを実施した結果、普段アニメを観ない学生も含め、活動に積極的に参加し、面白さを感じ、役割語・キャラクター言語や日本言語についての気づきや学びを得た学生が多く見られた。このことから、今後この授業活動が教育現場において有用な活動となっていく可能性を見出すことができた。

S3-17 (61).遠隔地外国人就労者を対象としたオンライン日本語会話セッションの試み

犬飼亜有美（仙台高等専門学校）・小河原義朗（東北大学）

宮城県内の遠隔地に散在して就労する外国人生活者を対象としたオンラインによる日本語会話セッションを試みた。そして、参加者にとってどのような目標や内容、形態が求められるのか、支援者側にはどのような役割が求められるのか、これまでのセッションを振り返り、分析を行った。その結果、複数の参加者が各自の課題を持ち寄って共有し、アイディアを出し合い、話し合いながら解決していくことが参加の継続につながっていた。支援者側にとっては、そのようにセッションで参加者をつなぎ、参加者の所属する職場を巻き込んだ課題解決につながるように促すことがポイントであることが示唆された。

S3-18 (62).共感できる「視点」を「展開、支持する」ように自身の経験を書く ―「詳細な文章」から「よく構成された文章」へ移行するための足場架けの試み―

萩原幸司（名城大学）

本発表では、上級の日本語作文授業での発表者の実践を報告する。学生達は「様様な主題について詳細な文章」は作成できるが、「複雑な主題についてよく構成された文章」は作成できず、*CEFR – Companion volume* (Council of Europe 2020: 66)（以下 CEFR-CV）が定義する B2 に留まっていた。CEFR-CV の記述から、発表者は C レベルの文章作成には「視点」が必要であると考え、学生達にそれを提示することで、C レベルへと至る足場架けを意図したのである。具体的には、共感できる趣旨のエッセイを読んだ上で、各自がそのエッセイ中の「視点」を「展開、支持する」文章を、自身の経験を「理由、関連する例」として加えつつ、作成するという課題を設定したのである。

S3-19 (63).学習者の能動的な学習を引き出す敬語の授業活動 ―アクティブ・ラーニングの視点から―

蔵本成美（別府溝部学園短期大学）・北野朋子（関西大学）・森岡千廣（京都先端科学大学）・伊藤萌夏（東京育英日本語学院）

本稿では、横溝（2019）が提案する「アクティブ・ラーニングを実現するための視点」を参考にしながら、学習者の能動的な敬語学習を目的とした授業を行い、その結果と考察について述べた。学習者が職員または店員となり、お客様に対して自社のサービスを説明するという形式をとった発表活動を行い、その後振り返りアンケートを実施した。この結果から、アクティブ・ラーニングを実践することで、導入事項が多いため受動的な学習となりやすく、学習者に身につく授業活動が難しい敬語学習においても能動的な学習を引き出せるという可能性を見出せた。

S3-20 (64).対話型短歌鑑賞を通した中上級学習者の解釈の変化

藤田百子（東京外国語大学）・八木真生（法政大学）・伊達宏子（東京外国語大学）

筆者らは、中上級レベルの学習者に対し、対話型短歌鑑賞活動を行い、その後のインタビュー調査から、彼らの短歌の解釈の過程や変化を分析した。その結果、助詞や「た」形など、文法構造の理解のずれによって、短歌の具体的な情景をイメージできない様子が観察された。また、文法理解が進まなければ、自身の解釈を補足するような他者からの働きかけの要素は取り入れる一方、自身の元の解釈からの大きな変化は生じないことが観察された。しかし、文法の正確な理解を得た場合は、自身の元の解釈からの大きな転換が生じていた。対話型鑑賞活動を行う際には、学習者の理解の段階を踏まえた適切な足場づくりが、教師の役割として重要であることが示唆された。

S3-21 (65).ジェンダーの視点からみる日本語中・上級教科書に登場する実在人物の職業

吉田沙織（恵泉女学園大学大学院生）

筆者のこれまでの調査によって、日本語中・上級総合教科書に登場する実在人物や生のコンテンツの作者は圧倒的に男性に偏っていることが明らかになった。そこで本研究では、実在人物が登場する教科書 16 冊について、ジェンダーの視点から実在人物の職業を調査した。その結果、女性の職業は 3 割近くが「主婦」などの一般人であり、女性が「私的領域」に押し込まれている可能性があることがわかった。また男性で最も多くみられた「学者」については、日本人男性以上に欧米人男性が多く、白人男性至上主義的な価値観もみられた。こうした日本語教科書の使用はジェンダーに関する偏った価値観（ジェンダー・バイアス）を再生産してしまう恐れがある。

S3-22 (66).初級日本語教科書で文法項目はどのように紹介されているのか ―継続動詞テイルの「使い方」に着目して―

佐藤明子（城西国際大学）

学習者が学んだ文法項目や語彙を実際の場面で適切に使えるようになるにはどうしたらよいのだろうか。木田・清水（2013）、川口（2019）では、使えない原因の一つとして、初級日本語教科書には、その文法項目の「使い方」が明記されていないことを挙げている。本稿では継続動詞テイル（動作の進行を表す）が初級日本語教科書でどのように紹介されているのか分析・調査した。対象としたのは、文法解説、例文、会話文、練習問題である。調査の結果、意味機能について明確に記述、もしくは提示したものは認められず、何かしらの要素が欠けていることが分かった。

【凡人社による出張販売】

期間中、会場で日本語教育の専門書店・出版社、株式会社凡人社による出張販売が行われる予定です。どうぞお立ち寄りください。

【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2022 年度会費（3,000 円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。郵便局に口座をお持ちであれば、振り込み手数料は無料になります。

ご不明な点は、jlem-ml#jlem-sg.org (#は@です)まで e-mail にてお問い合わせください。また、会員登録されているお名前と異なる名義でお振込みの場合も、同様にお知らせください。

【振込先】 （１）郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140　番号：69076511　加入者：日本語教育方法研究会

（２）銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店）　　金融機関コード：9900　店番：018

預金種目：普通 （または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651　　口座名：日本語教育方法研究会